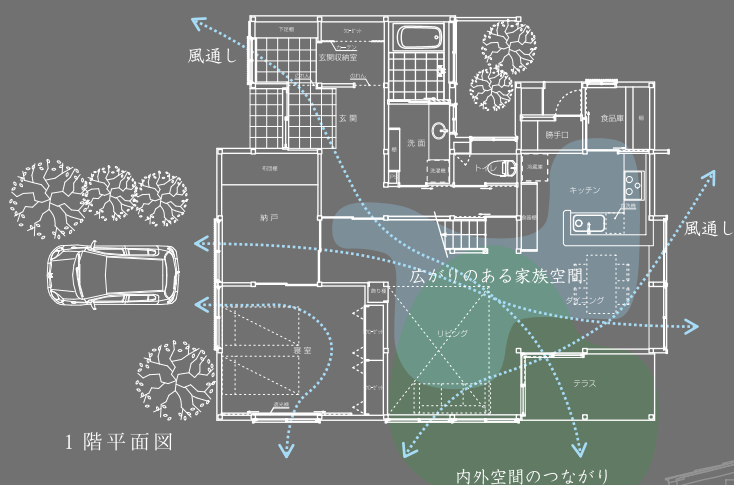


「住む人が愛着を育ててゆく家」

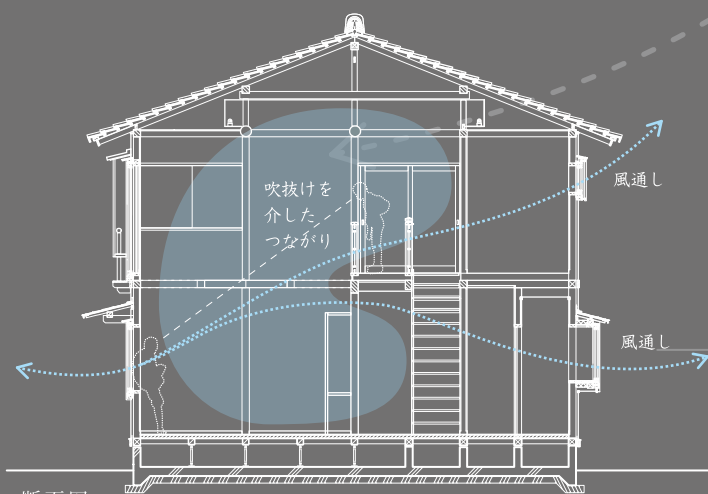
家を長持ちさせるのは物理的性能だけではない



広がり空間は風を通すだけでなく人の心をつなぐ



1 階平面図



断面図

住宅が持つべき資質については、耐久性、耐震性、気密性、断熱性、利便性など多くの要素がある。それらの物理的性能は互いに補完しあうことで総合性を得ることができる。

しかしその中で耐久性については、単に時間的経過を考慮するだけで得ることはできない。住宅は人が住む容器としての住まいなのだから、3次元の範囲を遥かに越えた4次元に及ぶ、長寿性が必要なのである。

物理的性能を重視するのは、住宅の基本的条件なのだから当然のことだ。しかし、そこでの生活を密閉生活へと誘導してしまう危険性がある。密閉生活は社会との接点を失うことになりかねないからだ。現在、危急の大問題として直面している地球温暖化防止のためには密閉生活とは正に相反する環境共棲こそが必須となる。先にあげた諸性能の中にも、これと矛盾する要素がでてくる可能性さえ大きい。例えばメンテナンスフリーなる資質については、長寿性を軸にとればナンセンスでしかない。空き家になると忽ち老化の速度が早まることは誰もが知っている。住んで毎日清掃することがメンテナンスの効果をもたらす。

長寿の家にする要諦は何か。それは住んでいる人がその家に愛着を持つことに他ならない。生活の要素、衣食住のすべてに対して、このことが指摘できる。愛着を持てば生活のあらゆる要素が住んでいる人の分身になるとしてもよい。

長寿の家は少なくとも百年を単位とするので、住んでいる人も代替りしてゆく。子々孫々と愛着をもって継承されてゆくことを前提としたい。家に愛着を持つ原点は、家を建てる時、住み手もその工事に関わりあうことだ。人によって関わり方は違ってくるであろうが、自分の子を育てるのと同様の「子育て」だと自覚すれば、愛着はそこから生まれざるを得なくなる。

建築家

吉田 桂子